Ishi Planning & Design Co.

Student Intern Workshop Report 2019

インターン・ワークショップ・レポート

この冊子は石塚計画デザイン事務所のインターン生が作成したレポートをまとめたものです

まちづくりにおけるファシリテーターの役割とは？

川崎市 地域コーディネーター研修 基礎研修編

緊張の中はじまった午前の部

今回のワークショップテーマは、「協働のまちづくり」。市民自治の視点や住民の先見性、行政の限界についての観点から事例を学びます。まず、まちづくり新時代の岐路に立つ区役所職員の現状への理解と、それに対応する必要性が説かれました。職員は、真剣な面持ちで聞き入っていました。

その後、市民文化局コミュニティ推進部協働・連携推進課から、「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」について説明がありました。歴史を背景に、今後どのように捉えるべきか「希望のシナリオ」を手に皆で考えます。地域・区域・市域の各レベルでビジョンが描かれ、区域で課題解決ができるよう市民が主体となって地域活動を行い、地域の価値を創出すること。今、職員にコーディネーター力が求められていること。石塚計画デザイン事務所の千葉晋也氏は、「行政の仕事の仕方にとらわれない新しい発想でコミュニティに関わる視点をもっていただくために今回の研修がある」とまとめました。

コーディネーターは、地域の特徴を把握しなければなりません。実際にデータを活用してチャート作成を行うと、職員たちの顔つきが変わりました。制限時間ギリギリまで真剣に討論が行われ、「こうできたら良いまちになる」など、ポジティブな意見も多く見られました。

グループワークを実践

午後は、石塚計画デザイン事務所が関わった事例をもとに地域課題の見つけ方を学び、課題を「見える化」して解決方法を探りました。模擬ワークでは、千葉氏自らファシリテーターとなり、希望者６人とグループワークを実演。なかなか希望者の手が挙がりませんでしたが、「誰もいないのなら私が」と数名の勇者によりワークがスタート。進行を円滑に進めるコツや紙に意見をまとめるノウハウを学びながら、グループの６人から川崎市の魅力について様々な意見が飛び出します。会場からは、ときに笑いも起こりました。

次に、プロッキーの使い方を教わり、実際に手を動かします。皆さん苦戦しつつも楽しそう！氏名を書いて皆で写真撮影し、意見をまとめる「くくりの言葉クイズ」で頭を柔らかくしてから、ワークを実践。個性溢れる内容がしっかりと整理され、皆さん自信に満ちた表情で発表していました。

ファシリテーターの継続的な学びを

初めてファシリテーターを体験した研修生。最初は消極的に見えましたが、最後に書き上げた台紙を拝見すると皆さんお見事！コツさえつかめば、誰もがファシリテーターになれるのかもしれません。インターンとして参加した私も上手にできるか不安でしたが、ワークを終えて少し自信がついたようです。グループワークなら、一人で考えるよりもずっと多くのアイデアに触れることができ、ワークショップを行うことで、さらに良いまちが目指せるのかもしれないとワクワクします。

今回は書き方・まとめ方が重視されましたが、ファシリテーターの受け答えによってアイデアの深まり方が異なるため、継続的な学びが必要だと思いました。（秋元）

●インターンレポーター：東京都市大学大学院 環境情報学研究科 都市生活学専攻 修士１年　秋元 友里
●開催日時：2019 年 6 月 3 日 / 13 日　●実施場所：市役所第４庁舎２階第１・２研究室　●参加者：係長級以下の区役所職員 50 名

地域のリアルな課題に真剣に向き合うことで、より現実的な研修に

川崎市 地域コーディネーター研修 ステップアップ研修編

実際に地域が抱える課題と３ヶ月間向き合う研修

今年度の川崎市「地域コーディネーター研修」の目的は、地域の課題解決の現場でのスキルアップ。地域に関わる多様な部署の若手職員を対象に実施されました。今回は中原区の町会の協力を得ることができ、町会が実際に抱える課題を扱い、リアルなプロジェクトのように進行していきました。

研修は、８月から11月の約３ヶ月に渡る全４回。１日目に実際に現地を歩いて町会の特徴や抱える課題の整理を行い、２日目は町会の方々や民生委員の方々から地域についてのヒアリングに挑戦しました。そして、３日目にそれらの活動から得た情報をもとに提案を考えるワークを行い、最終日に町会に提案を発表しました。

講評には町会長だけでなく、中原区長、現場を担当している保健師にも来ていただき、様々な角度から意見をいただきました。長期間実施し、研修時間外にもグループメンバーで連絡をとり合ったことで、内容の濃い研修になったと思います。

提案内容を聞いていると、地図を見るだけではなく実際に歩いて移動スーパーが実施できそうな場所を見つけてくるなど、ただの研修の課題ではなく実感として地域課題を受け止めていることが伝わってきました。研修の一環として学んだファシリテーションやグラフィックスなど、自分のスキルで、アイデアの魅力や実現のための検討を伝えようとする工夫も見られました。

地域に対する熱い想いがぶつかり合う

提案されたアイデアに対して、町会長は「既に検討済みのアイデアです」「この部分は取り入れることができそうです」など真剣にフィードバックしていました。職員側も、それに対して「この提案は今までに実施されたであろう試みとこう違います！」などと最後までグループで考えたアイデアの魅力や強みを伝えており、熱意のこもった応酬の中で、意見がさらにブラッシュアップされる場面もありました。

提案にはヒアリングから得た生の声が反映されていたこともあり、議論の焦点も具体的で、明日から取り組めるアイデアも多く生まれていたようです。私自身、地域について真剣に向き合う場に立ち会う事ができてよかったと強く感じました。

リアルに触れた職員の変化も

アイデアの提案終了後は、職員のみで簡単に振り返りを行いました。「地域に入る部署に所属しており、大変だったがこういった経験ができたのは今後の仕事に活かせそうだ」など前向きな意見が多く挙がりました。また、「よく考えてみると、自分だったら提案したイベントを行っても参加しないかもしれないと感じた」など、課題として取り組んでいたものをジブンゴトとして捉えた時の意識の変化を聞くこともできました。

このまちは既に多くの取組みをしている地域ということもあり、新たな提案をするのは大変だったと思います。しかし、終了後の表情からは達成感を感じ取ることができ、この研修を通じて得たものも多かったのではないかと思いました。（小田）

●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士１年　小田 史郎
●開催日時：2019年８月８日～11月15日　●実施場所：井田地域生活支援センターはるかぜ　●参加者：川崎市区役所等の職員

あたらしい市民館・図書館をさらにワクワクする場に！

新たな市民館・図書館に「引き継ぎたいこと」「期待すること」を出し合おう

多様なメンバーで考える新しい市民館・図書館

2025 年 ~2026 年度に鷺沼駅周辺に移転・整備される予定の宮前市民館・図書館について、市民みんなで期待することや将来像を考えるアイデアワークショップの第 1 回が実施されました。

鷺沼駅周辺の環境や、これまでのプロジェクトの経緯などについて市の職員からオリエンテーションが終わると、グループワークに移行。はじめは緊張しているように見えた方も、ワークショップが始まると、ご自身の考えを積極的に発言していました。中には大学生や高校生の方も参加されていて、社会人にも負けないくらいの熱量で、市民館･図書館に対する想いを語っている姿がとても印象的でした。

今の市民館・図書館への想いを語りあって

1 つ目のテーマは、現在の市民館・図書館の“気に入っていること”、“改善したいこと”。はじめは躊躇しているように見えた方も、他者の意見を聞いて「たしかに！」と頷いたり、「そういえば！」とバトンを引き継ぐ形で意見を出しあったりもしていました。

小学生のグループからもたくさんの意見が出ており、「これについて書いた人？」とスタッフが聞くと「はい！」とたくさんの手が挙がっていました。とりわけ”気に入っていること”を語り合っているときは、「あのイベント楽しいよね！」などと笑顔で友達と話しており、和気藹々とした雰囲気で進んでいきました。

こうなったら嬉しいな、をみんなで考える

次のテーマは“こんな市民館・図書館になったらいい”というアイデアや“期待すること”。ここでも小学生は大活躍！「寝転がって読めたらいいのにね！」など、大人では考えつかないような楽しいアイデアがたくさん飛び交いました。

社会人のグループも負けておらず、これまで話し合った内容を踏まえて、アイデアを続々と生み出していました。市民活動が盛んな宮前エリアらしく、“市民活動を支える仕組みや場がほしい”“様々な使い方ができる広場”など、市民館・図書館の今までの枠組みを超え、自分たちに合った市民館・図書館のかたちを考えていたようです。各グループから出た意見は、どれもワクワクするものばかりでした！

楽しいアイデアにみんなワクワクする

グループワークを終え、次はいよいよ発表の時間。たくさんの参加者の前で発表するのは緊張しそうだなと思いながら見ていましたが、むしろ「多くの方に伝えたい！」という気持ちが伝わってくるほど、どの方も堂々と楽しそうに発表されていました。「あ、ここもう少し話したい！」という声が上がったり、「たしかにいいなぁ」という声が会場から聞こえたりと、話し合ったアイデアを、みんなでワクワクしながら共有する良い時間になったと思います。次のワークショップでは、今日登場したアイデアを、より具体的な形に深めていきます。一体どのような形で実現に向かっていくのかとても楽しみです！（小田）

●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士 1 年　小田 史郎
●開催日時：2019 年 9 月 7 日　●実施場所：宮前市民館 大会議室　●参加者：宮前区に住んでいる方々

“自分ごと”として考える、みんなが使いたくなる場

みんなでつくる、あたらしい宮前市民館・図書館ワークショップ

多様な視点で考える、未来の市民館・図書館

2025年～2026年度に鷺沼駅周辺に移転・整備されるあたらしい宮前市民館・図書館を、みんなで考えるワークショップ。私は第2回に参加しました。10代から70代まで多様な約50名が集まり、第1回の参加者が出し合ったアイディアを深めます。早くから多くの方々が会場に集まって談笑する和やかな雰囲気のなか、ワークショップが始まりました。

まずは、第1回の振り返り。現在の市民館・図書館の改善したいことや気に入っていること、あたらしい市民館・図書館に求めることなどを確認しました。次に、未来へのイメージをふくらませるために、「武蔵野プレイス」はじめ、各地域で愛され、新しい活動を生み出している市民館や図書館の事例を伺いました。どれも既成概念を超えるものばかり！メモをとりながら熱心に聞いている皆さんの姿がとても印象的でした。

どんな市民館・図書館になってほしい？

イメージがふくらんだところで、グループワークへ。“地域とつながる”“文化・教養・ビジネスを生み出す”“情報の収集・発見・集積”をテーマに、グループにわかれてアイデアを出し合います。こどものグループは、“宮前の好きなところ”を出し合い、自らテーマを考えました。「緑が多く自然が豊か」「梨園が多い」など、私も宮前の魅力を知ることができました。なかでも、「坂が多いから運動ができて長生きできる！」という意見に、少し見方を変えるだけで、まちの課題が魅力や資源に変わることを教えてもらいました。

次に、たくさん登場した意見の中から、特に大切にしたいものを絞り込み、提案につなげていきます。実現したいことを、「誰が？」「どこで？」「どのように？」と掘り下げて考えることで、実現につながりやすく、具体的な提案になるようです。地域に住む多様な技能や趣味をもつ人々など、地域資源の発見にもつながるようでした。

いよいよ、夢を実現するための提案の発表！

続いて、グループで話し合った提案を発表。「多様な人が使いたくなるお手本となるバリアフリーの図書館」や「地域のスキルを持った人たちがつながれる講座」、「自然を感じながらリラックスできる空間」など、わくわくするような意見がたくさん！　他のグループの発表を聞きながら、頷いたり笑ったりしながら、期待に胸をふくらませているようでした。最後に、「特に大切にしたい」と感じた提案にシールを貼って投票。皆さんの思いがまとまりました。

その地域に住み・働き・学ぶ、皆さんならではの視点から、“自分ごと”としてその地域の人々のための場所を考えていく面白さや大切さが伝わってくるワークショップでした。協働してアイデアを出し合ったことが、これからも地域のことを考え、行動していくきっかけになったのではないでしょうか。宮前のあたらしい市民館・図書館は、みんなに愛され、新しい活動やつながりを育む、地域になくてはならない場になりそうです！（増田）

●インターンレポーター：首都大学東京 都市環境科学研究科 都市政策科学域 修士1年　増田 里奈
●開催日時：2019年10月5日　●実施場所：土橋小学校　●参加者：宮前区に在住、在勤、在学の10代から70代の市民47名

住み手の想いと作り手の想いがあふれるワークショップ

Fujigaoka Workshop2019 vol.2

藤が丘はこれからどうなっていくんだろう？

藤が丘駅前地区の再整備について、2019年1月に開催された第1回目に続き、2回目のワークショップが開催されました。前回の参加者による意見をもとに、今回は、再整備の基本的な考え方を共有しながら、住民と「こんな使い方ができたらいい」という意見やアイデアを出し合いました。

参加者は、10代～80代。その多くが、自分の住んでいるまちがこれからどのようになっていくのか、不安と期待が入り混じったような顔つきで聞き入っていました。藤が丘駅周辺は、区内の田園都市線7駅の中で人口密度が最も高く、賑やかなエリアです。一方で、駅への送迎にくる一般車の駐停車問題、住民の高齢化やショッピングセンター・病院の老朽化の問題があり、再整備の必要があると言えます。事業者の方が再整備のイメージについて各テーブルで紹介している際にも質問が多く飛び交い、参加者の藤が丘地区への熱い想いが伺えるようでした。

再整備についてもっと知ろう！

グループワークでは、再整備について良いと思ったところ、気になったところについて多くの意見が集まり、立ち上がってテーブルの上の地図を指差しながら話し合う場面も多く見られました。「ここはどうなるの？」「ここってこうなった方がいいんじゃない？」など多くの意見が寄せられる中、事業者の方が一つ一つの意見に向き合い、丁寧に説明する様子に、「少しでも住民の方に納得していただける計画にしよう」という姿勢が強く表れているようでした。

藤が丘らしさと、これからの藤が丘

休憩を挟んで、次に“駅周辺のミライのシーン”や“あったら良いなと思う場”について意見を出し合いました。

藤が丘は、昔から豊かな緑と落ち着いた街並みで住民から親しまれてきました。「歴史を尊重した整備を行ってほしい」「藤が丘らしさを損なわないでほしい」といった地元愛が感じられる発言が多く、藤が丘という地域が住民の間でどのように捉えられているのかを、私もより深く知ることができました。また、「今の藤が丘はお店がすぐ閉まってしまうからもう少し夜遅くまで遊べるまちになったらいいよね」「もっと魅力があふれてここで住みたい！と思う人が増えたら良いよね」といった、再整備を機にまちがより活性化することへの期待が感じられる意見も登場していました。

藤が丘のこれからをつくっていきたい

各グループで出た意見を並べてみてみると、再整備に伴う心配や不安も多くある一方で、藤が丘の良さがもっと増えてほしいという前向きなものも多かったようです。

また、今回のワークショップが、自分の住むまちについて考えるきっかけとなったのではないかと思います。今後計画が進んでいく中で、住民と事業者双方の想いがどのように形になっていくのか楽しみです。（小田）

●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士1年　小田 史郎
●開催日時：2019年9月8日　●実施場所：横浜市藤が丘地区センター 中会議室　●参加者：藤が丘地区に住んでいる方々

みんなの「やってみたい」を形にする

まちのがっこう祭をみんなでつくろう！準備会議①

みんなで考える「まちのがっこう祭」

南町田に、自然とにぎわいが融合する新たな拠点を創り出すため、2016年度から開催されてきた南町田拠点創出まちづくりプロジェクト。2017年から3年間かけて「〇〇のがっこう祭」という名前で市民参加による企画を進めてきました。今年は、まちびらきを盛り上げるため、新しい鶴間公園で「まちのがっこう祭」を開催。9月の3連休の初日、「セミナープラス南町田」で開催のための準備会議が行われました。

子どもからご年配の方々が参加し、「まちのがっこう祭」やこれからの鶴間公園、南町田を盛り上げていくアイディアを出し合い、具体的なイメージを考えました。みなさんが参加された動機も、「まちのがっこう祭に出展する」、「出展はしないけれど一緒にがっこう祭を盛り上げたい」、「南町田でやってみたいことがある」など、様々。年代や動機は違えど、ワークショップを通して、自分のアイディアを形にしていくことに期待感を抱いている様子が垣間見られました。

大きな地図に、みんなの想いをのせる

プロジェクトや「まちのがっこう祭」の説明を経て、全体意見交換が行われました。参加者全員でつくる大きな1つの輪。その中央に鶴間公園の大きな地図がおかれ、一人ひとりの「やってみたいこと」が記されていきました。皆さんで、「普段の活動」、「がっこう祭で実現したいこと」、「南町田でやってみたいこと」などを発表し、他者の発表にも真摯に耳を傾けているようでした。50人を超える参加者一人ひとりの想いを聞き、地図に記していくため時間もかかり、大変な作業ではありましたが、その分、出来上がったときの感動もひとしお！ひとつの大きな地図は、皆の夢や想いの詰まった、わくわくするものになりました。

一緒にがっこう祭を盛り上げる仲間との交流

全員で具体的な「がっこう祭」のイメージを確認したあと、「子ども向け」、「音楽」、「飲食」、「展示・体験」、「ものづくり」、「スポーツ」、「物品販売」、「その他」の8つのテーブルに分かれて、アイディアを形にしていきます。各テーブルに1～2人ずつ入ったスタッフに、実際に出展するにあたっての悩みを相談し、出展計画書を記入。自分のアイディアを実現するために、どんなものが必要か、どんな場所が最適かなど、スタッフとだけではなく、同じテーブルに座る人とも相談しあいながら出展計画書を作成していきます。その交流によって、一人では考えつかなかったアイディアが浮かんだり、悩みを共有できたりと、それぞれの想いはより素敵なものになっていったようです。

最後に、再び全体で情報を共有し、第2回目の準備会議につなげてワークショップを終えることができました。「まちのがっこう祭」がどんなものになるのか、漠然としていたイメージが、今回のワークショップを通じて様々な人の想いが重なり合い、少しずつ動き出していく様子に、参加者のみなさんのわくわくする気持ちはさらに高まったのではないでしょうか。私自身、がっこう祭への期待がふくらみました！（大橋）

●インターンレポーター：津田塾大学 学芸学部 国際関係学科3年　大橋 朋実
●開催日時：2019年9月14日　●実施場所：セミナープラス南町田2F ホールA・B　●参加者：まちのがっこう祭に運営側として関わりたい方々

未来へつなぐ、植樹祭

南町田グランベリーパーク 鶴間公園の「植樹祭」

ドキドキワクワクのまちびらき

「南町田グランベリーパーク」のまちびらきまで半月を切った10月27日、プレイベント第一弾として「植樹祭」が行われました。鶴間公園のみどりに関心のある市民に向けてまちびらきの前に公園の植樹を一緒に行うことで、公園のみどりの状況を共有しながら、これからも公園のみどりを育むサポーターとしての気持ちを育てようと企画されました。

集まってきたのは、85人のガールスカウト、2018年の「苗木づくり大作戦」参加者をはじめ、鶴間公園のみどりに関心がある住民300名。あいにくの曇り空でしたが、できあがったばかりの公園にはじめて入りウキウキしている子供たちへ、石塚計画デザイン事務所・千葉氏の「おはようございます」の挨拶から、元気にイベントが始まりました。

次世代へと繋ぐ、植樹祭のストーリー

今回は、講師に「街の木を活かすものづくりの会」代表の湧口善之氏を迎えました。2019年、巨大台風の相次ぐ接近のために、倒木など木が私たちの生活に及ぼす危険性が高まっていることや、ごみ同然のように大木が積まれている日本の木材の現状をふまえて、今後どのようにまちと木が関わってゆくべきか、みんなで考えます。湧口氏の熱い想いは、公園の緑と都市が繋がる南町田グランベリーパークの構想とも重なり、今後のモデルとして大事な1ページを刻みます。そんな想いを反映してか、曇り空はみるみる晴れていきました。

さらに、2018年のイベントでつくった苗木を持ってきてくれた2組の子どもたちが「水やり頑張りました！」「台風で倒れないか心配だったけど大丈夫だった！」と発言。子どもたちの努力により1年前の苗木がまた未来へと繋がったことに、会場は拍手に包まれました。今回のイベントでは、公園のデッキの中に、新たにオオシマザクラを植樹します。町田市役所公園緑地課の職員が、同じ東京都である伊豆諸島の大島町から船便で送られてきた桜の道のりを語りました。

お待ちかね！植樹体験

デッキでは、オオシマザクラの植樹がはじまりました。東京綜合造園の方の「みんなで植えていきましょう」のかけ声を機に、ステージへ上がるガールスカウトたちや地域の子どもたち。「オオシマザクラの花は白っぽい色」との説明があると、「開花が楽しみだね」という声が溢れます。好奇心いっぱいの子どもたちからもたくさん質問があがり、木への思いが深まっていったようです。みんなで丁寧に土を被せ、木の名前が書かれたプレートを巻きつけて終了。素敵な花が咲くのが待ち遠しいです。

30分ほどで全ての植樹を終え、みんなでおやつ休憩。声をかけると、「楽しかったー」とのうれしい反応に、未来へと繋がる取り組みをみんなで楽しんでできたことに、私も改めてこのイベントの価値を知ることができました。丁寧にみんなで植えたからこそ、公園を大事に使うきっかけが生まれ、「またここに戻ってきたい」と思わせてくれるのでしょう。素敵なイベントに参加することができ、うれしかったです。（秋元）

●インターンレポーター：東京都市大学大学院 環境情報学研究科 都市生活学専攻 修士1年　秋元 友里
●開催日時：2019年10月27日　●実施場所：鶴間公園　●参加者：鶴間公園のみどりに関心のある地域の方々、ガールスカウト

みんなでつくった、ひとつの「まちのがっこう祭」

南町田グランベリーパークのまちのがっこう祭

終日あたたかな雰囲気につつまれた鶴間公園

11月初めの土曜日、晴天の下、2019年「南町田グランベリーパークのまちのがっこう祭」が開催されました！　11月13日にオープンする「南町田グランベリーパーク」を一足早く体感するため、新しい鶴間公園にたくさんの人が集まりました。様々な企画とともに、公園全体にまちの皆さんの楽しそうな声と笑顔が花開きました。キッズランやタグラグビーが行われ、一日中子どもたちの元気な声が響いた運動広場。道に並んだ屋台の美味しそうな匂いと「がっこう祭をどう楽しもうかな」とわくわくする来場者の皆さんの声で賑わっていた水道みち。ステージから奏でられる素敵な音楽と、まちのみなさんの間で育まれるたくさんの会話で盛り上がった広場。終日、がっこう祭は温かな雰囲気につつまれました！

新しい施設とまちの人の距離をぐっと近づけた「ウッドブロックワークショップ」

そんな中、私は、鶴間公園の木でつくったウッドブロックを加工し、「パークライフ・サイト」内のパークライフ棟のエントランスの壁面をまちのみんなで仕上げる「ウッドブロックワークショップ」のお手伝いをしました。受付が開始されるやいなや、長蛇の列！　多くの方が、自分で加工したウッドブロックが新しい南町田グランベリーパークの一部になる魅力を感じられたのか、大人気の企画となりました。

列に並ぶ間、近くの方と「自分たちで削ったウッドブロックがどんなふうに壁の一部になるのかな」とコミュニケーションを交わすことで、参加者の皆さんの、「新しいまちの一部を自分たちの手でつくるんだ！」という気持ちはますます高まるばかり！　「どの種類の木がいいかな」と、ウッドブロックを選ぶところから、「パークライフ・サイト」内のパークライフ棟に貼りつけにいくところまで、終始、参加者の皆さんのわくわくする様子が見受けられました。

今回のワークショップを通じて、参加したまちの皆さんにとって、新しい「南町田グランベリーパーク」は、単なる商業施設ではなく、新しいまちの一員として親しみのある存在になったと思います。

まちのみんなでつくりだす「まちのがっこう祭」

イベント中、来場者同士で新たなつながりを楽しむ姿や、出展者同士でお互いの企画を楽しむ姿がたびたび見られ、出展者と来場者という垣根を超えて、想い想いに楽しむ様子が印象的でした。出展者の皆さんの企画だけではなく、来場者の皆さんが、どんなふうに公園で過ごし、企画を楽しみ、まちの人と会話をつむぐのかということも、ひとつの「がっこう祭」をつくるための大切なピース。まちのだれかではなく、まちのみんなでつくったイベントであったからこそ、最後に「来年もやりたいな」、「また来たいね」、「来年は出展してみようかな」という声が聞こえたのではないでしょうか。そして、いつかこの日を振り返った時、大変だったことやうまくいかなかったことが失敗や後悔ではなく、温かな思い出の1ページとして刻むことができるイベントになったように思います。（大橋）

●インターンレポーター：津田塾大学 学芸学部 国際関係学科3年　大橋 朋実
●開催日時：2019年11月2日　●実施場所：鶴間公園・パークライブサイド　●参加者：「まちのがっこう祭」ブース出展者、来場者、当日ボランティアの方々

暮らしている人々がまちをつくっていく

新田西部地区のコミュニティのミライを考える地区別懇談会

３年がかりの行動計画づくり

草加市で暮らす人々と行政が協力して地域課題解決のための行動計画を３年かけて作り上げていく「コミュニティプラン」。１年目「将来像とプロジェクトテーマを描く」２年目「プロジェクトを企画する」３年目「仕組みを考える」という段階を踏んでつくっていきます。ここで選ばれたモデルプロジェクトはお試し実践もします。

今年は２年目。新田西部地区では昨年、地域福祉のこと、商店街や駅前の賑わいのこと、子育てのこと、子どもの遊び場のこと、多世代交流のこと、防災のことがプロジェクトテーマとして選ばれ、今回はこれらを４グループに分かれて振り返りながらプロジェクトを具体化していきました。

まちの課題はマジでむずかしい

地域福祉を考えるチームでは本当に難しい問題も。高齢者の孤立防止のために、地域の方々が普段の生活の中で支援を必要とする高齢者の発見や見守りを、ボランティアで行う見守りネットワークという仕組み。実際この活動を行っているのは高齢者で、老々見守りの状態。見守り者が明日見守られる側になってもおかしくない状況です。若い人は仕事が忙しいし、最近では 70 歳まで働く人が多いため、人材不足で活動の継続が危ういそう。深刻な問題です。理想と現実の差が大きく、なかなかいいアイディアが生まれません。そんな難しい場面でも、チームにいるファシリテーターは丁寧に話を聴き、問いを投げかけ、メンバーのプロジェクトを具体化まで導こうとします。今回の懇談会のルールとして掲げられていた始めの一歩を踏み出すために大切な考え Light（簡単に）、Quick（早く）、Cheep（安く）を思い出しながらみんなで想いを譲り合えるところまで譲り合い、自分たちで実行できるレイヤーまで手繰り寄せていきました。課題がどんなに大きくても、始められなければ意味がないですよね。

最適なまちは自分でつくる

最後に各グループで取りまとめたグループワークの成果を全体で発表して共有します。どのグループの課題もどの街でも起こりうるような難しい困りごとばかり。しかし、誰かに頼むようなアイディアではなく、このまちに住む自分たちから変えていこうとするアイディアが多く生まれていました。今年度は全３回あり、今回は１回目。これからどんどんブラッシュアップされていきます。

まちというものは幻想で、私やあなたが住んでいるということだけが事実です。誰かに頼むのではなく、住んでいる自分が考えていくことでしか、本当に自分たちにあったまちづくりはできないんだろうなと学んだ回でした。（西川）

●インターンレポーター：社会人インターン　西川 理奈
●開催日時：2019 年 8 月 27 日　●実施場所：勤労福祉会館 1 階ホール　●参加者：地域住民、地域団体の方々

インターン・ワークショップ・レポート 2019
Student Intern Workshop Report

2020 年 3 月 31 日 発行

株式会社　石塚計画デザイン事務所
http://www.community-design.jp/

Intern Reporter
秋元友里・大橋朋実・小田史郎・西川理奈・増田里奈

Special Thanks
鈴木徳子（Writer ／ Editor）

Sapporo office
〒 060-0002
札幌市中央区北 2 条西 2 丁目 26 番地 道特会館 4F
Tel:011-251-7573　Fax:011-251-7574

Tokyo office
〒 150-0045
東京都渋谷区神泉町 20-24 Bricks 7F
TEL:03-3461-5120　FAX:03-3461-5144